

# 研究課題：「BPSDの心理的要因と社会的要因に焦点化した介護職への認知症ケア研修に関する実践的研究」

代表研究者：小野寺 敦志（国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科 准教授）

## 1. 研究の背景と目的

認知症ケアにおいて、認知症の行動・心理症状（BPSD）への対応は、大きな課題となっており、厚生労働省も、BPSDへの対応を課題としてあげている。介護現場においても、BPSDへの対応技術へのニーズがあり、具体的な対応策を講じていくことは重要課題といえる。しかし、介護現場の研修の現状は、十分にそのニーズに対応しきれていないと難しい。そこで、介護現場のニーズに対応した研修システムを構築していくことは、認知症ケアの質向上のためにも重要であるといえる。

本事業は、介護職が認知症高齢者が示す認知症の行動・心理症状（Behavior and Psychological Symptoms of Dementia：BPSD）への対応を中心にしたケアの対応力を向上するための研修カリキュラムを作成実施し、その内容の有用性を検証し、現場で活用できる研修システムを提案することを目的とした。

第1年度の研究は、研修システム案（研修カリキュラムとテキスト）を作成のうえ、研修を実施し、カリキュラムの内容の有用性を検証し、研修システム案の内容を検討し修正を行うことを目的とした。

第2年度は、研修システム案（研修カリキュラムとテキスト）の第3回改訂を行い、その改訂版を用いた研修を複数の介護保険事業所に実施し、研修システムの有効性を検討し、研修システムを完成させることを目的とした。

## 2. 方法

### 2-1. 手続き

本研究の実施の流れは、図1に示したとおりであった。研修システム（研修カリキュラムとテキスト）を作成し、その内容を検討するための研修ならびに研修受講者へのアンケート調査を実施した。

第1年度は、研修システムの第1案、修正版の第2案を作成のうえ、研修を実施し、調査による評価を行った。第2年度は、研修システムの第3案を作成のうえ、研修を実施、調査による評価を行った。調査は研修システム内容の評価に加え、研修内容の介護現場での有効性の評価を行った。

### 2-2. 研修システムの考え方

研修の主眼となる BPSD の理解と対応は、国際老年精神医学会による BPSD の 4 つの背景要因（遺伝的要因、神経生物学的要因、心理的要因、社会的要因）のうち、後者の

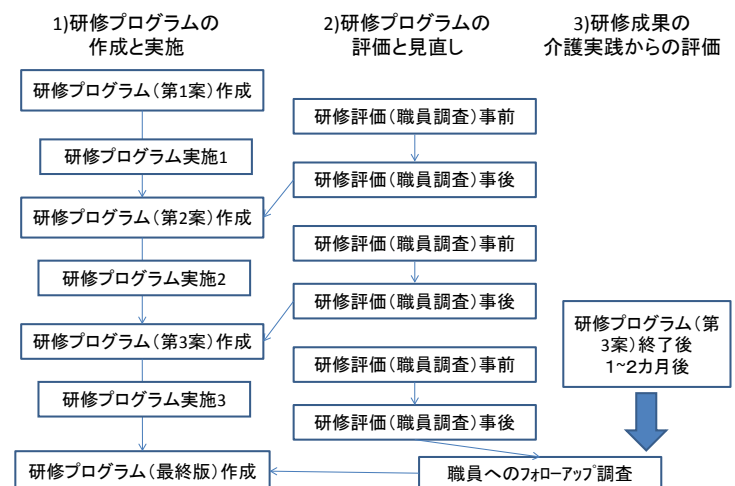


図1 本研究事業の実施の流れ

心理的要因と社会的要因を、ケアによる対応が求められる要因と仮定した。本研究は、この要因に対応するものとして、a)心理的要因：認知症高齢者の心理的理解を促す、対人理解を目的としたロール・プレイング、b)社会的要因：認知症高齢者と環境の影響を評価し、BPSDと環境の関係をアセスメントするために、応用行動分析学の考え方を設定した。

### 2-3. 調査項目、調査方法ならびに調査期間

調査項目は、研修前調査の項目は、調査協力者の基本属性、認知症利用者のイメージ、共感経験尺度(角田, 1994)、BPSDの受容と困難の程度であった。研修後調査の項目は、研修前の調査項目に加え、研修内容についての感想と意見を問う項目であった。follow up調査は研修前の調査項目に加え、研修後業務を通しての経験をふまえての研修の有効性を問う項目であった。

調査方法は、研修前、研修後、follow up調査ともに、調査協力事業所の職員を通じて、調査協力者に調査用紙を手渡し、留め置き式(回答後、密封式封筒へ封入)にて回収した。なお、follow up調査は第2年度のみ実施した。

調査期間は、第1年度は第1回目、平成23年1月15日～平成23年2月28日までと、第2回目、平成23年7月15日～平成23年9月10日までであった。第2年度は、平成24年4月25日～平成24年9月10日までであった。

### 2-4. 研修期間と研究協力者

第1年度の研修は、介護保険事業所で1回、2介護保険事業所で各1回実施した。第2年度の研修は、4介護保険事業所で各1回実施した。

第1年度1回目は、上記最初の調査期間中に週1回計4日間の研修を実施した。研究協力者は介護保険事業所の介護職5名(男性3名、女性2名)であった。

第1年度2回目は、上記2回目の調査期間中に週1回計4日間の研修を実施した。研究協力者は、2介護保険事業所の介護職14名(男性4名、女性10名)であった。

第2年度は、上記の調査期間中に週1回計4日間の研修を実施した。研究協力者は4介護保険事業所の介護職28名(男性10名、女性18名)であった。

## 3. 倫理的配慮

本事業を実施するにあたり、主研究者の所属する国際医療福祉大学の倫理審査委員会の倫理審査を受け、承認(承認番号:10-163)を得たうえで研究を実施した。なお、調査協力者への倫理的配慮として、研究協力者に口頭ならびに文書による説明を行い、同意を得たうえで、研修ならびに調査を実施した。

## 4. 結果

### 4-1. 研修システム作成結果

第1年度は計2回の研修システムの作成と実施を行い、第2年度に研修システム第3案の作成と実施を行った。すべて研修は全4回で一研修カリキュラムとした。第1案から第3案の各回の研修タイトルと研修時間、研修テキスト類の変遷を表1に示した。研修シス

テムの最終版は、研修タイトルの変更はないが、テキスト類の一部見直しを行い修正した。  
表2に研修システム第3案(最終案)の研修概要を示した。

	研修回	1	2	3	4
第1案	研修タイトル	ロール・プレイングその1	ABC分析	ロール・プレイングその2	まとめ:実践に応用することを考える
	テキスト類	1) ロール・プレイング体験テキスト 2) ABC分析活用テキスト 3) 研修4回目振り返り資料 4) ABC分析ワークブック 5) 研修進行表(講師用)			
	所要時間	60分	60分	60分	60分
第2案	研修回	1	2	3	4
	研修タイトル	研修のねらい、本人の感情をとおして、その行動を理解するために(その1)	認知症の人の行動・心理症状の理解とアセスメントの方法	本人の感情をとおして、その行動を理解するために(その2)	まとめ:本研修の振り返り
	テキスト類	1) 講師用テキスト~研修のねらい・教育的ロール・プレイング・ABC分析・研修のまとめ 2) 受講者用テキスト~内容は講師用に準じる 3) ABC分析活用ワークブック 4) 講師用の手引き 5) 講師用ロール・プレイング映像教材			
	所要時間	75分	60分	60分	60分
第3案	研修回	1	2	3	4
	研修タイトル	研修のねらい/本人の感情をとおして、その行動を理解するために(1)	認知症の人の行動・心理症状を理解し対応するために	本人の感情を通して、その行動を理解するために(2)	まとめ:本研修の振り返り
	テキスト類	1) 講師用テキスト 2) 受講者用テキスト 3) 「行動読みとき」ワークブック 4) 講師用ロール・プレイング映像教材と説明書 5) 講師用の手引き 6) 自己学習用資料			
	所要時間	90分	70分	60分	60分

研修回	研修概要
1	本研修のねらいの説明を行う。ここに、認知症の行動・心理症状(BPSD)の説明を追加。教育的ロール・プレイングの内容説明の講義を行い、続けて、ロール・プレイングのウォーミングアップ、ロール・プレイング体験を実施する。実施後、今回の研修内容の振り返りを行なう。
2	応用行動分析学(ABA)の説明の講義。ABAの考え方を「行動読みとき」と言い換える。「研修ワークブック」を使用して、ABAの考え方に基づく、BPSDを理解するワークを行なう。介護現場で活用するための補足の講義を行う。
3	第1回目の教育的ロール・プレイングの内容の振り返りを行った後に、この回もロール・プレイングを実施する。可能な限り参加者全員が体験できるように進める。最後に振り返りを行った体験の共有を行う。
4	前回3回までの研修を振り返るため、教育的ロール・プレイング、行動読みときのねらいと内容の要点について講義する。その後、今回の研修で学んだことを振り返りのための、グループ討議を行い、意見交換を行う。

#### 4-2. 研修実施に伴う研修システム評価調査の結果

評価調査の結果は、第2年度の研修システム第3案実施に伴う評価調査の結果を以下に提示する。第2年度の研究協力者の基本属性を表3に示した。なお、研修は4介護保険事業所で個別に実施したが、研修全体の効果を検討するために全体で検討を行った。評価尺度による研修前、研修後、follow upの3群比較の結果を表4に示した。繰り返しによる一元配置の分散分析の結果、それぞれの尺度に置いて有意な効果は認められなかった。Follow up時の研修効果の有無の結果を表5に示した。研究協力者が少ないこと、比較する統制群が存在しないことから統計的検討は実施しなかった。研修後、介護現場でBPSDを呈する利用者への対応を行った16名中、教育的ロール・プレイングについては13名が、応用行動分析については9名が、役に立ったと回答していた。研修全体については22名

中 16 名が役に立ったと回答していた。

項目	人数	年齢(歳)		介護職数(月)		在職数(月)	
		N	Mean	SD	Mean	SD	Mean
男性	10	40.6	14.4	50.2	42.6	40.8	37.9
女性	18	39.4	14.3	78.8	57.6	38.7	25.3
合計	28	39.8	14.1	68.6	53.7	39.4	29.7

項目	研修実施前評価		研修実施後評価		研修後follow評価		F値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
共有経験尺度	38.6	1.77	38.3	1.40	39.8	1.68	n.s
共有不全経験尺度	34.7	2.02	35.7	1.78	34.3	2.18	n.s
BPSDを呈する認知症者の受入度	62.9	2.16	62.0	2.84	63.6	3.00	n.s
BPSDへの対応の困難度	71.5	3.07	72.3	3.42	72.5	3.55	n.s
繰返しのある一元配置の分散分析	n.s=no significance						

注) 研修前, 研修後, follow upの3回に回答した研究協力者は22名であった。ゆえ, 22名を分析対象とした。

項目	合計	あり		なし	
	N	N	%	N	%
研修後のBPSDへの対応の有無	23	16	69.6	7	30.4
RP研修の役立ちの有無	16	13	81.3	3	18.8
ABA研修の役立ちの有無	15	9	60	6	40
研修全体の役立ちの有無	22	16	72.7	6	27.3
BPSD=認知症の行動・心理症状	RP=教育的ロール・プレイング		ABA=応用行動分析学		

## 5. 考察ならびにまとめ

調査結果から、評価尺度による研修効果は統計上認められなかった。この点は、研究協力者の経験年数のばらつき、評価尺度の選択の妥当性等の影響も考えられ、今後の研修評価実施の課題といえる。一方、研究協力者への研修効果についての直接的な質問による研修効果は、全体で 16 名 (72.7%) の支持を得たことは、一定の研修効果を有する研修システムであることを示したといえる。

第2年度の研修システムの評価調査では、上記の結果に示した以外に、研修内容への記述回答を得た。さらに講師役への調査も実施し、研修内容への記述回答を得た。それらの結果をふまえ、研修システム最終版の作成にあわせ、講師向けの研修を研修システムの中に組み込むことにした。その概要は、2日間(計16時間程度)の集合型研修とした。

本事業は、当初、研修システムをパッケージとして介護保険事業所へ提供することを目的としたが、本事業の研修システムの完成度を考慮すると、研修システムの理解と使用するノウハウを講師担当者に直接提供する必要性が明らかになったといえる。

今後の展開として、講師向けの研修を実施し、その講師が担当する研修に対して研修システムのパッケージを提供していく研修制度を整備し、普及啓発に努めていく予定である。そして、研修システムを改定し、より有用な内容に向上させていく必要であると考えている。